

伝統と最先端がシンクロする

# 新しい東京の夜明け

東京の交通インフラとして機能する山手線。しかし、都市の潜在的豊かさを表現するのにこの環状線ほど適した媒体はない！ JR 東日本による画期的プロジェクトを探る。

東京の豊かさを山手線で表現したい！

一周34・5kmの環状線。高輪ゲートウェイが2020年に開業すれば全30駅。沿線駅の1日あたりの乗車人数の合計は約540万人。以上が国内屈指の鉄道線区「山手線」の概要。だが、その情報では誰の心も動かない。なぜなら山手線は、日々の利用者すら、大都市東京に適した交通インフラ以上の認識をもちにくい存在だからだ。

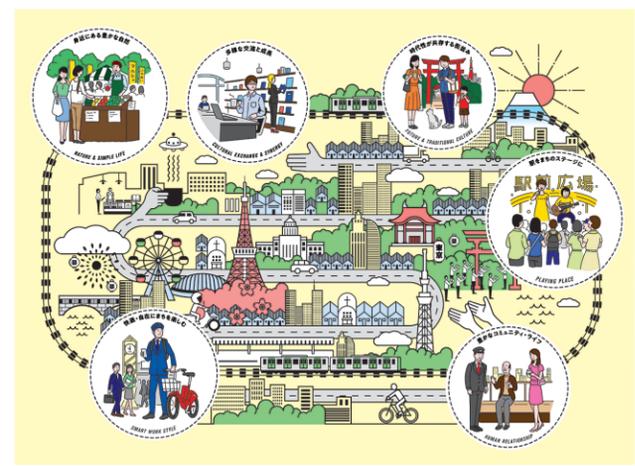
このままでもいいのか？ ここで取り上げる「東京感動線」の取り組みは、山手線を運営するJR東日本自体の疑問視がきっかけだったと、グループリーダーの1木典子さんは計画の起点を説明した。「大都会のど真ん中の地上を走る環状線という形態自体が世界的に珍しく、しかも線区を一周する車窓からは、最先端の流行から伝統的な文化まで眺めることができま



す。そんな山手線のユニークネスを形成している各駅各街の個性を、このプロジェクトを通じて多くの方々に伝えたいと考えました」計画の終着点はどこだろうか。「个性的で心豊かな都市生活空間をつくり上げることが最大の目的です。2030年を目標に、沿線の再発見と新しいライフスタイルの発信を続けていきます」すでに発進している山手線プロジェクト。進行中の5つの活動を順次紹介していく。

1・2) JR東日本が発行する冊子『TOKYO MOVING ROUND』1号で紹介した、ブラウシュガー1STの荻野どりさんと明治神宮。下)0号は、RYOZAN PARKの竹沢徳剛さんを紹介。これらは「山手線を通じて表現したい」街に根づいた人々の営みの例

## 感動が眠る山手線沿線を、5つの視点から発掘！



コンセプトを「東京感動線」としたのは、山手線がつなぐ東京の街で出合える、さまざまな感動を大切にしたいから。左はプロジェクトのキービジュアル。駅界隈で交流する人々を描いた。未知との出会いにはUFOをモチーフに表現した



### Independent project



🔴 TOKYO SEEDS PROJECT  
世界五大陸からデザイナーを招聘。山手線で移動しながら、異文化視点で各駅各街を体験してもらい、山手線をメディアにした東京の魅力を伝えるコミュニケーションデザインを提案してもらう試み。アテンドはJR東日本社員が担当した



🔴 「あさって」の駅  
歴史、地理、文化などの地域性、テクノロジーの進展やライフスタイルの変化を踏まえ、少し未来の山手線の駅を模索。東京工業大学と共同で研究し、12駅の可能性が描かれた



### Collaboration project



🔴 東京感動線×TABICA  
「山手線の暮らしを旅しよう」というコンセプトで、体験予約サイトTABICAとコラボしたプログラム。専用サイトでは、山手線各駅沿線の街歩きプログラムが紹介されている



🔴 SOUNDS GOOD  
こちらにもブランデッドオーディオレーベル「SOUNDS GOOD」とのコラボにより、音の官能と呼ばれる「ASMR」を展開。すでに大塚駅周辺の街の個性を表す音が配信済み



5つ目の視点は次ページで！

紙という媒体を通して、未知の価値観に出会う



1号は「代々木・原宿」を特集。大胆にも表紙は、ロゴの大きさを変更。紙すら異なるのは「街も人も違えば、同じでよいわけがないから」



— 先のページでは紹介できなかった5つ目の活動となるフリーマガジン「TOKYO MOVING ROUND」について、「東京感動線」に携わる4名の方にお集まりいただきました。まず、この冊子の概要を教えてください。

**馬見新** およそ東西南北に区切った山手線各駅から毎回2〜3駅をピックアップし、沿線それぞれの街の魅力を紹介していく冊子です。発行は3カ月スパン。0号では駒込・巣鴨・大塚を、1号では代々木・原宿をそれぞれ特集しました。次号の秋葉原・御徒町は、6月末の発行を予定しています。

— どこで手に入りますか？

**馬見新** シェアオフィスやカフェ、映画館など、ゆつくり読んでいた

だけの場所に置かせていただいています。

— なぜ、いまあえて紙という媒体を選んだのですか？

**馬見新** 実は当初の計画になかったのです。心に響く手段をリサーチしていく中で、口コミをベースに広く共感を呼ぶには紙媒体が適しているという結果を得て、フリーマガジンの発行をスタートさせました。

**一木** 人が情報を受けて実際に行動するまでには4段階あると考えます。順番にすると、情報として知る／ストーリーとして知る／興味をもつ／行動する。これまでも線区別のプランディングを行ってきましたが、1の段階にとどまってきたところがあります。そこで、どうすれば4段階の階段を上がっていただけるかを考え、紙媒体を加えることにしたのです。

— 紙媒体の特徴をどうとらえていますか？

**一木** 写真やレイアウト、そして手触りも、ウェブより感覚に訴求する表現力が高いと思います。そしてまた、じっくりと情報を知りたい人には好ましいメディアです。

— 紙媒体ならではの伝わり方を意識されたのですか？

**一木** 共感・共有を大事にしたいこのプロジェクトで



0号で特集した「駒込・巣鴨・大塚」は確固たるイメージが乏しいエリアだが、すでに進化している街のリアルな様子を丹念にレポートした

**一木** 私はある方から、0号で特集した記事を読んで、「東京で一番行ってみたい街が大塚になりました」と言ってもらえて、とてもうれしかったです。

— 1号の「代々木・原宿」では、各駅よりちよつと離れた場所まで取材範囲を広げていますが、エリアの基準はどうお考えですか？

**一木** 〆界隈〆とでもいうのでしょうか。頑なに駅で定義する優先されると情報自体のリアリティがなくなりやすから。よいエネルギーを凝縮させるには、損得や利害は不要です。

— 制作にあたっては皆さんも取材されたそうですね。

**馬見新** はい。貴重な経験になりました。強く実感したのは、それぞれの街にじかに触れてみて、そこに確かな暮らしの息遣いがあるという事実でした。先に服部が自分たちの街目線と言いましたが、私たちがまた自分の目線で見て取材していくと、すべてがリアルな感覚を覚えました。

も、街の個性はさまざまですね。私は「あさつての駅」プロジェクトで12の駅を見つめ直して痛感しました。

**道正** 東京もまたローカルなんです。ひと駅ごとにひとつの街の規範感が備わっているから、街の、出るはずだろうと。

**馬見新** 最初は私たちが議論を交わして、沿線をいくつかのエリアに分ける方針も検討していました。けれど勝手に括弧が押し付けられてしまうのは、自分たちが取材をして思い知らされたことでした。

— フリーマガジンや各プロジェクトを通じて皆さんも変わられたようですね。

**一木** 一番変わったのは道正さんじゃないかしら。街歩きプロジェクトで明治神宮に行つてから、二十四節気や七十二候を気にするようになったでしょう。

**道正** そうなんですよ。昨年の大晦日には、年末恒例の年越しそばを粉から打つたりしました。そんなこと生まれてはじめてや

りたくなつちやつて。このプロジェクトの影響、大きいです。

**服部** 変わるということに関しては、0号のタイトル「東京は、どう変わる？」が大好きです。このプロジェクトがはじまった頃は、その考えがなかったけれど、いまは「変わる」は「広がる」でもあることを自分たちが体感しています。

**一木** おそらくこれまでの東京は、利便性、効率性、経済性といった縦の価値軸を重要な物差しにしています。私たちはこのメディアで、横の価値軸になり得る豊かさを広げたいのです。しかし、そう簡単に変化は訪れないので、今後10年を見据えて、じわじわ確実にこの思いをシェアしていきたいですね。

は、ウェブ情報を浴びせるだけではなく手法にも挑戦したかったのです。

**道正** つながりをつくりたいという我々の想いにおいて、このフリーマガジンが一般読者だけではなく、取材させていただいた方々にも、地元の誇りをお届けできたらいいなと思います。そして実際に、街の人々からそのような声もいただきました。

**服部** 主語を「JR」にしなかったことが共感を得られた一因ではないでしょうか。自分たちの街目線で表現されているという声も聞きました。そうしたコンセプトが各プロジェクトで貫かれている点も、総合的な信頼を生む要因になると思います。

— 制作にあたっては皆さんも取材されたそうですね。

**馬見新** はい。貴重な経験になりました。強く実感したのは、それぞれの街にじかに触れてみて、そこに確かな暮らしの息遣いがあるという事実でした。先に服部が自分たちの街目線と言いましたが、私たちがまた自分の目線で見て取材していくと、すべてがリアルな感覚を覚えました。

**服部** 駅ごとに区切つてとらえて

ウェブサイト、記事アーカイブを公開中！  
「東京感動線」のフリーマガジンで掲載された記事は、ウェブ上でアーカイブされている。また、FacebookやTwitter、Instagramでも情報が更新されるので、ぜひ注目を



山手線プロジェクト  
馬見新香織さん

取材した街はすべて自分事になりました

街歩きを体験したおかげでそば打ちまでしちゃって……



山手線プロジェクト  
道正俊明さん



山手線プロジェクト  
服部暁文さん

街の個性は駅ごとに存在しています

普段の景色が新しく見えるキッカケになればと思います



山手線プロジェクト  
チームリーダー  
一木典子さん